

「考える」と、そこにおける言語

氏 家 洋 子

0. はじめに
1. いわゆるラングについて
2. 「表現」の地点
3. 「表述」部を含むことば
4. 「書く」について
5. メルロー・ポンティにおける言語・思考

0. はじめに

「思考」の本質を reflective などころに見て、次々と考えていくその過程を「思考」と定義する時、これと「言語」とはどのように係わり合っていると言うべきか。

この論は基盤を思考におき、それと言語とのつながりのとらえ方について考察しようとするものである。そこで、順序として、次に「言語」についてどう見るのかも大まかなところをおさえておかねばならない。しかし、「言語」とは何かということを「思考」から独立した形で考えていくことは私の目的とするところではない。最終的には「思考」の実体について明らかにしたいのであって、そのためにはその様々な段階で、「言語」がいろいろな形を見せて登場する、その係わり合い方を明らかにするという形において、言語についてその都度定義していけばいいだろう。

別の言い方をすれば、人間が外界を認識していく姿を浮彫りしようとする時、言語はどう係わっているのかの問題ということになる。

1. いわゆるラングについて

今述べたような考え方自体、「言語」と「思考」について、そこに密接

な関連を認めながらも、夫々を独立的に存在するものとみなしているわけである。

「思考」とは、冒頭に述べたような所に本質を見る限り、「考える」作用としてとらえられねばならない。

一方の——という論じ方はここではしたくないが、今、便宜使っておく——「言語」についても、これを過程・行為とする見方は時枝誠記氏の言語過程説で提出されている。表現されたものを言語と考える行き方がそれまでは普通のこととして行なわれていたことは、言語の研究、イコール、ラングの研究であったことに余りに明らかであろう。

ラングの研究それ自体が目的化され、ラングが体系化されればそれで説明がついたというのでは一時的に教育の用に途するに役立つ程度ではないだろうか。

人間を知る、その重要なポイントとして、人間の思考をさぐるということ根拠を据えて、そこにおける言語を見ていこうとすることが、ほかならぬ「人間の」言語を知る態度として妥当なのではないかと考える。

それでも、自己目的化されたという弊害によって、ラングについて全く否定し去ることはまた当を得ていないことになるだろう。

ここから、ソシュールの分類に従って、パロールを認めようとか、もっと比重を置くべきだと言おうとしているのではない。人間の言語に、いわゆるラングとされる面があるのは、思考との関連において認めることができるというわけである。

ある、人間の目に映る現象を人が表現する場合、その表現が言語範疇に属する形をとるなら、人は普通、言語の線条性にのせてかからねばならない。それにのせるものとは、特に言語表現の場合はモノ自体、行為自体、感情自体を、人間として共通の了解事項となっている、言わば、ある概念化の過程を経たものの形によって表現するわけである。

表現がこうした構造をもつものなら、ラングないしはラング的なものを確認することはどうしても必要になる。これを言語と定義しようなどとい

う気は無論ない。思考との係わり合いを考察しようとする時、ここでは存在の確認のみをしておこう。

全体の流れの中では確認という形でよく、それ以上の比重を置いて考える必要はないと見るのだが、一步この中に踏み込み、概念化にさまざまな次元があることを見ると、そこにはそれなりの思考の考察との係わりが当然問題になってくるのであって、例えば、現存の品詞分類がラング研究を自己目的化したものの結果であるために、思考に基づく言語研究からする品詞分類——という語は適当でないが、言わば、これにあたるものの意——とは千里の徑庭を隔てていることを見せつけられる思いがする。

いわゆるラングの存在を確認し、次にこの内部に立入ろうとするなら、私は思考を表現する地点に目をおくことによって思考と言語との係わり合いを見、そこに大ざっぱに見て、思考が表現されるに際し、二つの異なる相があることにまず注目したい。

2. 「表現」の地点

その手始めとして、「表現」なる語について考えることから入っていきこう。この語が本来の意味において使われるなら、何か、在るものを、例えばパイプを通じて、外界に表わすということになりはしないか。4章で見るように、何かを表わす、目に見える形にするということが「書く」と同様、この語においても差異表示的に働いていると言うべきだろう。そして、この時、その在るものとは思考と言ってよいのではないのか。

この場合、思考とは思考の或る結果である。言いかえれば、「考える」作用・行為の結果としての「考えられたもの」ということになる。勿論、その、ある時間毎に区切られた思考がそのままパイプとしての表現行為を通じ、結果としての表現となるというように機械的に思考と表現の関係を見ることはできない。思考作用とはいまだ明らかにされていない複雑なメカニズムをもつものであり、その表現において、単純に外観的なものとしての蚕の繭出し作業的なものを仮定することにはいささか無理がある。

我々は言いよどむ。また、言い直す。その時、表現しようとして頭の中で意識されていることがあるが、ことばを選び取って表現してみると、どうも頭の中のものとは違うようであるという場合、また、妥当に表現したと思ったのに、口に出してみたら、思考内容そのものに立返る形で違うと反省される時——こんな場合があることを思うと、思考の中に深部のものと表層部のものと考えてみるができる。

思考とは電流の走るようなもので、それらのいくつもの線が或る場合にショートし、火花を散らすように結びつくというように感じられる部面がある。そういう、言わば実体のないものを説明するには自分の意識を内省する方法も動員しなければならない。

私は先に思考について自分なりに上限・下限を決めてみた¹⁾。それは感覚・知覚から出発し、無意識をも含む、しかし、その本質はそうした所から出発して reflective な作用を続けていく、その所にある、つまり、過程的なものとしてとらえるべきだとした。

その時私は「思考」ということばを使っていたのだが、作用としてとらえるという意味を妥当に反映した語として、標題の「考える」を選んでみることにしたのである。

無意識をもこの中に入れたのは、ある時、まるで意識していなかったことが何かを「考える」過程でパッとそれに結びつく形で、まさに甦えにくるということがよくあるからである。

こうした思考の世界には、電流の比喩で続ければ、そこを流れる電流の量、即ち、線の太さとか、いくつもの線が結びついたとかというような形で思考の密度の大小が考えられる。また、ともかく、その世界とここでの「表現」の問題を考えると、言語という線条性に見合った形で表現はなされていく。

そこで、その線条性にのせて表現できる段階の思考と、まだ不分明で奥深い所でどろどろしている段階のものとは考えられるというわけである。

1) 「言語と思考 序説」『文芸と批評』28, 1972. 3.

勿論、これを図式的に考えて、左側に思考、右側に表現があり、その差異は表現行為を通じたか否かにあると言おうとしているのではない。思考も表現行為の中で更に深まることがしばしばある。これらの関係はかなり入組んだものとなっている。

しかし、感覚・知覚から出発する「考える」行為が表現としての定着をみるまでという形で、言語が感覚・知覚に与えるものということを一応切って、この中だけで一時的に静態化してみれば、大まかには上でとらえたような図式で考えてみてもよいだろう。そして、いつも思考と言語の問題がこの両者の中間に位置する所で問題にされているということが、両者の係わり合う地点だから当然のことではあるけれど、それだけでは片手落ちで、この地点のみを問題とする仕方に、既に問題の把握の仕方に制約ができてしまっているということがあると言わねばならない。

「考える」作用の積重ねにより、ある程度固まってきたものを、表現しようとする時、それは単純に

これは机だ。

ここに机がある。

というような、判断や眼前の事実の叙述と違って、その作用の積重ねが厚ければ厚いほど、こうした判断や事実の叙述（単純に事実と言ってしまっ
てはいけませんが、後の「表述」との段階的差異を認める必要はあるだろう）等に使うと同じ語を使いながらも、その選択・組合せ等に、語の段階でも文の段階でも苦しい闘いを展開することになる。

こうして表現することについて注目する時、私はごく一般的に使われている、そして、それ故、意味の密度の低まった、「表現」なる語と区別して、例えば「表述」とでもいうべき語を使って、この私の考えを言い表わそうと思う。単純に、機械的に語と結びつけるのではなく、独自の、長い過程を含むものを表わそうとする場合のことである。

3. 「表述」部を含むことば

そして、ここにおいて、表現しようとする時点を静態化して、固まっているもの・いないものを区別することはこれ自体では意味が少ないが、その一時的静態化でなく、そういう時間の連続する中で人間の考える行為・表現する行為が営々と積み上げられていっていることを思うと、そういう長い時間を含む全体の中で、我々がいわゆるラングとして定着させてきた様々の語の中にも、表現に際し、単純に固まっていてすぐ表現できるもの、たとえば物につけられた名前のようなものがあり、また、先述の「表述」に該当する、長い時間心の中をめぐって後に表出される、たとえば日本語の副詞における「どうにも」等々が考えられる。

こうしたことは文・文章のレベルも絡み合ってくる問題であり、言語学における語・文・文章という単位分けに対する疑いにも係わってくることである。

外界の事物に対応する形でつけられた語に対し、心的現象のように人間の内側にあるものを表現する場合は単語のレベルで既に、前者の語を含めた表現、例えば

これは机だ

と認識を表わす時に近いものが生じている。この例文は判断という認識形態を表現している文であるから、

あの時はどうにも恥ずかしくて困った

というような文における「どうにも」の方が認識内容の表現には手間がかかる。つまり、「表現」というより「表述」である。この文全体に示される認識の形態が、この「どうにも」一語には表わされている。

一般の言語研究において、これは単語であり、副詞という品詞分類に組み入れられている。しかし、

とても小さな虫

とてもうれしいです。

などにおける「とても」と同じ品詞分類に入れられるにしては、思考との

係わり合い方が著しく異なっている。

つまり、この「どうにも」は「困った」と切離しがたく結びついているのである。言わば、従来の言語単位に即した言い方をするなら、文のレベルに属する認識がこの語には込められていると言わねばならない。

大体のところこのような見方で思考から言語を見ていこうとするのが私の基本的立場である。

なお、次章から述べる所とも関係あることだが、この章で見たような「表現」の地点への注目が、「考える」からそれとの言語の係わりを見るところという方向性・比重の保たれる限りにおいて必要でも、逆に言語から思考との係わりを見るところという形では、「考える」の奥深く入れないという制約をもつため、今迄述べてきたような私の見方を言語と思考の二元論だと批判する見方を成立させるものと思われ、先に、この地点のみの注目は片手落ちとしたわけで、その点補っておく。

4. 「書く」について

以上述べてきたような行き方、特に、思考を reflective な点にその本質を見るところという行き方から、発想の段階ではその国の言語との深い係わり合いを認めながらも、より高次の段階でユニバーサルなものを見ていく²⁾ ために、この私の立場に対し、言語と思考を非連続化させているという批判を受けたので³⁾、この稿の後半はそれに対して考える所を記そうと思う。

蛇足のようなのだが、批判というものは紙面で行なってほしい。立論の根拠がまるで違っていることを見つけるにも、ある程度思考の物質化は必要であるし、有効でもあろう。

今までにもいくつかの形で触れているが、言語と思考とが深く係わり合っていることは事実であろう。私はただこの二者を並列的に扱って比較しようとすることはせず、思考の側から言語についても考えてみたわけであ

2) 「日本語と日本人の思考」『日本語教育』9 1973.3 参照

3) 1972年4月、『文芸と批評』28の合評会席上で文学研究者より出された。

る。

私に対する批判，言語と思考の非連続化，というものはその辺についてはどのような立場に立っているのか不明であるが，この二者を連続的とする見方は，例えばM・メルロ＝ポンティの次のような叙述に代表させて考えてみる事ができる。

Elle (=la pensée) progresse bien dans l'instant et comme par fulgurations, mais il nous reste ensuite à nous l'appropriier et c'est par l'expression qu'elle devient nôtre. (p. 207)⁴⁾

思考は瞬時に，稲妻のように進む，が，それに続いて，それを我々に合ったものにする事が残っているのであって，思考が我々の思考となるのは表現を通じてである。

確かに思い当たることがある。それだけではない。この *expression* を2章の，時間を一時的に固定化させた方の「表述」とするならば，それは「表現」というよりもっとはっきりわかってきそうだ。しかし，もし，ここでそういう方向へ考えを進めていけば，それは4章で明らかにする *parole authentique* に通じる。

この章では，メルロ＝ポンティのこのような叙述を解釈する際に陥りやすい誤りについて考えてみよう。特に彼の叙述を問題にしなくてもよい。我々はよく，表現していると頭の中が整理され思考が続くという。ものを書いている時などよく経験することだ。「書け」ば何かが出てくる，生まれてくると思う。

だが，「書く」とは何か。それは物理的に字を紙の上書きつけることではないだろう。「書く」ということが，また，紙を除いて代わりに音声をもってくれば「話す」ということが，「考える」ことと切離せずにそこにあるのではないか。

つまり，「話す」「書く」という「表現」行為に言語を代表させ，それと思考との関係を述べる行き方は，AとBとの関係について述べているので

4) M. Merleau-Ponty: *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945.

はなく、Aと、当然それに含まれるある係わりを既に持っている後者との関係ということになり、AとA'との関係とむしろ言うべきものであろう。

「書く」ということが、他の、人間の動作と同レベルで切取られたものと考えてはこの場合まづいということである。無論、人間の動作を示す語は人間の行動の言わば複雑さそのままに多種多様な表現をもっている。その複雑さは表現の角度についてもその多様性を説明する。

ところで、「書く」という語の場合、「考える」と切離せずにあるにしても、「考える」とは異なる。「作る」とでも言いたい部面、つまり、「考える」により近い所を一方の極に据えれば、他方の極に来るのは、「かく」と書き表わした方が妥当なもの、もし、「書く」と書くなら、絵画におけるモデルのように字をみなして、書道において「書く」ようなものが考えられる。

「書く」なる語はこれほどの幅をもっている。後者の場合は、「考える」という静的思索から遠く、物理的な行為としてとらえられる場合である。が、いずれにしても私達が「書く」という時、どの辺に比重が置かれているかの違いはあっても、言語に関する語であるからそこには「考える」行為が大なり小なりあり、また、「表現する」物理的動作も必ずしも持っていると言わねばならないだろう。

しかし、「書く」ことが思考を生み出すと言う時、往々にして、そこに含まれる「考える」行為が忘れ去られ、「言語とは表現する行為である」という見方をあたかも支えるような顔でこれと短絡することがある。

そして、この時、「書く」とは単なる行為と言われるものではない、そこにある「考える」を見逃してはならないなどと言うと、言語を行為としてとらえず、思考と別のものになっているという批判があびせられる。

しかし、「書く」という語の内包する「考える」に注目すると、「書く」ことが思考を生み出すという言い方は、「考える」ことが思考を生み出すと言いかえることができる。そして、この場合、「考える」の reflective 性が支持されることになるわけである。

5. メルロ＝ポンティにおける言語・思考

次に、3章のはじめに引用したメルロ＝ポンティの叙述と一致し、また、それを支えていると思われる部分などがあるので、それについて考える所を述べてみよう。

彼が言語と思考を切離せない、というより、思考を自分のものにするのはことばによってであると説く時、実はそのことばとは人がはじめてその表現を作り出す時のものに限っている。

彼は同書で一般のことばを区別して注記をつけている。即ち、

Ainsi, la paprole, chez celui qui parle, ne traduit pas une pensée déjà faire, mais l'accomplit.

このように、ことば (parole) は話す者にとって、既にできあがっている思考をことばの形にして表わすものでなく、それを遂行させるものである。

につけた脚注に次のようにある。

Il y a lieu, bien entendu, de distinguer une parole authentique, qui formule pour la première fois, et une expression seconde, une parole sur des paroles, qui fait l'ordinaire du langage empirique. Seule la première est identique à la pensée. (p. 207).

勿論、はじめて表現された本物のことばと、二次的表現、即ち、一般的な経験的言語 (langage) を作っている、ことばについてのことばとを区別する必要がある。最初のものだけが思考と同じものとみなしうる。

思考が表現される所に着目して、そこで働くことばを本物のことばとしたが、それ以外の一般的なことばを二次的表現とし、この存在を無視したわけではないが、特に注目するということはしていない。従って、一次的なものとの二次的なものとの関係についても考察されることがなかった。

これは彼が着目した対象箇所及び方向から来る制約とも言えるが、この着目が彼の考察における出発点であったなら、もっとその周辺へも広がったはずなのだが、後に述べるように身体論の一環をなすという位置を占めるものであったため、ことばへの考察は言わばここが帰結点となっていたわけである。

ところで、この一次的言語の働く場においてさえ、彼が思考を実はこと

ばと区別していたと読み取ることは可能である。今引用した部分に前接する所は3章で引用した所なのであるが、その冒頭の部分はたしかにことばとは一応区別して考えられる *la pensée* の存在を認めていると言うべきだろう。

思考は稲妻のように走る、しかし、それを自分のものにするのはことばによってであるという趣旨の部分だけでも、思考とことばとを区別していることは窺える。「しかし」以下が強調部分であり、それを彼の主張として受取るのは受取り方として妥当だが、その強調の成立が、基本的には思考とことばとを区別したその上にできあがっていることを認めねばならないのではないか。

そして、それでも、彼が表現されない思考に対して否定的だった理由は、この叙述の少し前の部分に明らかである。即ち、

Une pensée qui se contenterait d'exister pour soi, hors des gênes de la parole et de la communication, aussitôt apparue tomberait à l'inconscience, ce qui revient à dire qu'elle n'existerait pas même pour soi. (p. 206).

ことば (*la parole*) となることや伝達の際の拷問のような苦しみを離れて、思考が自分に対して存在することに満足していたら、それはすぐに無意識に陥るのである。そして、その思考は自分に対してさえ存在しないということになるだろう。

というのであるが、文字通り実体のない思考のままであつたら無意識の裡に消え去るものが、表現という形を通すなら自分のものになるということは、後に“*Signe*”等から引用する、点的対応がことばと意味との間にはないという内容に見合った形で思考がことばをとらえようと格闘するさまを物語っていると思うが、それだけの時点に押し込めず、そのようなことの繰返しのうちに「考える」がその表現を得、更に「考える」が発展していくというように考えるなら、そこで得た表現が「考える」の素材となっているという面がここにあると言えるだろう。1章で見たように。

また、私は次のような部分にも、「考える」の独立的存在を確認するのである。

Quand je fixe un objet dans la pénombre et que je dis: «C'est une brosse», il n'y a pas dans mon esprit un concept de la brosse, sous lequel je subsumerai l'objet et qui d'autre part se trouverait lié par une association fréquente avec le mot de, «brosse», mais le mot porte le sens, et, en l'imposant à l'objet, j'ai conscience d'atteindre l'objet. (p. 207).

私が薄暗がりの中である対象を見定め、《これはブラシだ》というとき、私の心の中にブラシの概念があり、その下に対象を包摂し、他方その概念は《ブラシ》なる語とのたびたびの連合によって結びつけられる、というのではなく、言語が意味を担っており、それを対象にあてはめることによって、私は対象にぶつかると意識をもつのである。

語が意味を *porter* していてそれを対象に *imposer* することにより私は対象をとらえたと意識する、というのであるが、対象に *imposer* するところに思考の作用を見ないわけにはいかない。

この著作は1945年のものだが、1960年の“*Signe*”においても、意味とことばとの関係について、*correspondance point par point* というようなものはない、単に意味を帯びているだけだ、そしてそれが *langage* を通してその個々の文の中でピタリと決まていくのだと説いている (p. 54)。

これを理解する一つの道として、意味を担っている語をラング、それをその場に応じた形でピタリとあてはめて使う、そのことばをパロールと考えることができはする。

しかし、また、次のように思考について述べたところがある。彼の主張からは、ずれることになるが彼が意識していた事柄が叙述から汲み取れるとでも言うべきものである。“*Signe*”の中に現われる。

Le langage signifie quand, au lieu de copier la pensée, il se laisse défaire et refaire par elle. Il porte son sens comme la trace d'un pas signifie le mouvement et l'effort d'un corps. Distinguons l'usage empirique du langage déjà fait, et l'usage créateur, dont le premier, d'ailleurs, ne peut être qu'un résultat. Ce qui est parole au sens du langage empirique, — c'est-à-dire le rappel opportun d'un signe préétabli, — ne l'est pas au regard du langage authentique. (p. 56)⁵⁾.

5) M. Merleau-Ponty: *Signe*, Paris, Gallimard, 1960.

言語 (langage) は思考を写すのではなく、それが思考をこわし、再び作り上げるとき意味作用を行なり。それはある一步の足跡がからだの運動と努力を意味するようにその意味を担う。既に作られた言語の経験的使用と創造的使用とを区別しよう。更に、前者は結果としてあるものの一つでしかありえない。経験的言語においてことば (parole) は——つまり、前以って確立されている記号を折よくよびおこすものは——それを本物の言語 (langage) とみなすことはできない。

と言うのだが、このうち問題になる

il se laisse défaire et refaire par elle

の部分をもより詳しく説明するものが語られていない。しかし、可能性としては、思考とことばとの一回的關係が静態化されたかに見える今までの叙述と違って、もっと長い時間を考慮に入れた結果、langage の意味作用は思考によってこわされ、また新しく作られる時になされるという、この論述が出て来たものと考えることができる。思考の、言語から独立した存在を認めていたことはこの部分からも予測できるが、この少し前のところで、それについてのもっとはっきりした叙述と見ることのできるものがある。

travaillant les uns contre les autres, ils sont hantés à distance par elle comme les marées par la lune, (p. 55).

語は互いに働き合いながら、月による潮の干満のように、離れた所から思考に付きまとわれている。

思考の独立的存在を認めていることは、“Phénoménologie de la perception” の引用でも既に明らかなと思うが、このように思考の「表現」の地点でもそれに言い及んでいる所に注目したい。

しかしながら、こうしたことは彼の主張しようとする所だったのでなく、むしろそれからずれるものが偶々表面に出てしまったとでもいう感がある。

つまり、彼は言語について語ったが、それは自分の身体論の一環としてであった。そして、ここに彼の言語論の独自性も、また、弱点もその原因を見ることができる。彼の現象学は経験論及び主知主義を常に批判する形で進められた。従って、対象を主体から切離して考える行き方は取らず、

また、純粹思考のようなものは認めない。

この立場に原則的に私は賛成であるが、それでもなおかつ、彼の言語論において、私が1章で扱った「概念化」の問題がその比重を小さくして置かれていることに弱さを見るのである。それはちょうど、『行動の構造』についての長谷川宏の次のような解説に見合った形で、概念とか意味とかが一定のものとされなかったことに通じているとは言えないか。

行動には、どんな下等動物の行動にも、部分に分割すれぼうしなわれてしまうような全体的意味があり、それは自然科学的な手法によってではなく、あいまいさをあいまいさのままに定着する現象学的手法によってしかとらえられないことをあきらかにするのが『行動の構造』の主眼であった⁶⁾。

彼は身体の一つのあり方として、言語を視覚・運動・性等と共に考えた。結局彼の言語論は身体論の一環という、必然的制約を担っている。ということは、そう言う私が既に彼との相対的比較において言語に寄って考えているということでもあるか。概念化に対する比重を小さいと見るのはこの辺に基づくものとも言える。

しかし、言語に寄った立場という言い方をしたが、これを客体として扱おうとするのではなく、「考える」の方向から、そこにおける言語の係わりのさまを見ようとしたのである。

彼の言語論、特に思考と言語の係わる所で、ある点を強調しようとしたために(勿論それには必然性があるのだが)、薄明の中に押しやられたものについて私の視点から妥当な位置を取り戻したいと考えた。

— 1972・11・7 —

6) 「メルロ＝ポンティと言語」『理想』456, 1971・5.